

ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第37回放送の概要 (2011年7月30日放送)

パーソナリティ

さくら (安本久美子)
タロウ (佃 由晃)
なかちゃん (中嶋邦弘)

コアラさんの地域瓦版

アコちゃん (三木文子)



ミキサー

門ちゃん (門田成延)
一ノ瀬悟

相談役

わだかん (和田幹司)

会計

小山俊則

(CM) JR兵庫駅前の「神戸ルミナスホテル」、抜群のロケーション、最新の設備と最高のおもてなし、ビジネス、観光の快適な拠点として皆様のお越しをお待ちしております。1階コローレではおいしいコーヒや紅茶、おいしいランチやお食事なども楽しめます。今日は「神戸ルミナスホテル」様(TEL:078-511-7700)のご協力を頂きました。

1. オープニング

明日7月31日 神戸ユニバー記念競技場 (総合運動公園)において INAC 神戸レオネッサ対岡山湯郷 Belle の試合が 15 時キックオフで開催されます。入場は無料です。ワールドカップで同点シュートを決めた時のコーナキックをした宮間選手とシュートをきめた澤選手の対決が見られます。また関西TVにおいて 16 時から放送があります。

2. ゲストコーナー (1): 神戸常盤大学 戸谷富江さん、矢野志歩さん

本日のゲストは神戸常盤ボランティアセンターコーディネータの戸谷富江さんと神戸常盤大学看護学科4年生の矢野志歩さんにお越し頂きました。

神戸常盤大学は校祖玉田貞也氏が明治41年、神戸中山手通の地に私立家政女学校を創設したものです。平成20年には創設100年を迎えた。学校法人玉田学園は神戸常盤大学と神戸常盤大学短期大学部、神戸常盤女子高等学校、神戸常盤大学附属ときわ幼稚園を運営している。

ボランティアセンターは2009年8月1日に玉田学園全体のボランティアセンターとして位置づけられ高等学校及び幼稚園の父兄も対象にしている。常盤ボランティアセンターの特徴は授業に位置付けた活動ではなく純粋に学生、生徒、父兄が自分に興味のある活動をしてもらうようサポートすることである。阪神淡路大震災の時長田区で唯一の大学として被災し、その時避難所として地域に開放し、教職員も一緒に避難所の運営とボランティア活動を行った。さらに全国から色々な支援も頂いた経験から、学園としても地域への社会貢献をすること、学生に対しても災害発生時に自分たちをどのように守り、周りを助けていくかということを実験でもやっているがその中にボランティア活動を入れていくことを目的にボランティアセンターが設立された。

阪神淡路大震災の時戸谷さんは小学6年生で大阪に住んでいたため特に被災はなく当日登校していた。矢野さんは尼崎に近い豊中に住んでいたため壁にひびが入り食器棚が倒れるなどの被害があり、外に出ると鳥居が倒れていた。

ボランティアセンターの役割は、学生は地域の方と一緒に活動をするだけでなく何故その活動がされているかを一緒に考えて行くことを大事にしている。他大学との連携については法人としてはないが学生同士が活動の中で繋がりを広げている。神戸市社会福祉協議会が大学生向けの夏休みボランティアバスを出すとやっているが、常盤としては岩手県立大学、京都のユースビジョン、西宮のさくらネットの3者とプロジェクトを組んで学生を送り出す計画をしている。

ボランティアセンターの運営については、学内に運営委員会がありそのメンバーは看護学科の准教授がセンター長となり医療検査学科、看護学科、幼児教育学科、口腔保健学科の各学科の教諭、高等学校及び幼稚園の教諭、事務方の職員、長田区福祉協議会ボランティアセンターの職員、学生スタッフで構成されている。2カ月に1回の頻度で開催し、細かい活動は学生スタッフ主体となって動くが運営委員会は方針決めることが主たる目的である。

矢野さんがボランティアに興味を持ったのは、大学1年の後期の授業「ボランティア理論」で先生からボランティア活動の提案があり始めたのが最初で、UD（ユニバーサルデザイン）フェアで喫茶店の手伝いをした。12月には長田区福祉協議会のサンタ団でサンタになって活動した。12月24日に親御さんから預かったプレゼントをサンタになって届けに行き子供たちと遊ぶという活動である。この活動を行なっている中で自分も楽しめ子供たちにも楽しんでもらえるところに魅力を感じた。また活動をする中でバルーンアートを覚え子供たちにプレゼントすると非常に喜んでくれた。

学生がボランティアをする意義は、社会に出た時に人との交流において慣れていないと、アルバイトだけでは得られないのかのようにかかわっていけば良いかがわかってくる。社会交流をしているとどのような話をしたらいいのかなどが身についてくるのがいいと思う。就職時の履歴書に書けるということであっても1つのきっかけとしてボランティアに参加すれば、その後何度も参加するうちに活動自体が楽しくなっている。現代は無償で行ったことにお礼を言ってもらえることが少ないのでとてもいいことだと思う。

3月末に東関東大震災のボランティアとして岩手県釜石市に行ってきた。移動手段が中型のスクールバスのため限られた空間で1日過ごすのが大変だった。バスには炊き出しの材料、調理道具などが車内の半分以上占めていた。一日目は殆どバスで過ごした。最も苦労したのは方言で相手に何度も聞き返すことが多かった。また震災で心に傷が付いているのでどのようにかかわったらいいのか考えながら話をした。炊き出し活動の中で一緒に食べる時に被災者から神戸の震災について聞かれたことをきっかけに話を広げて行った。神戸の震災と似ているところもあるので、どのように復興していったかといったことを良く聞かれた。他には佐用町や長田の水害のボランティアも経験した。佐用町ではボランティアセンターの立ち上げから手伝った。看護学生でもあることから熱中症の予防に力を入れた。このような経験が看護師になった時に大いに役立つと思う。



3. ミュージック：ナタリー・コール「スマイル」

あこちゃん推薦の本日の曲は、元はナットキング・コールが歌っていた「スマイル」です。チャップリンの無声映画の曲に後で歌詞がついたもので娘のナタリー・コールが歌っています。この曲の好きなところを関西弁で言うと「笑ってこーよ、笑えよー」「笑っていたらいつかお日様があんたのところに輝いてくれるでー、雨ばかり降り続かへんでー」という曲です。2フレーズ目の歌詞に「you must keep on tryin' 今頑張らなんいつ頑張るねん、what' s the use of cryin' 泣いてばかりやったらあかんでー、smile」というところに災害などが起こった時にも、心に苦しい時があった時にも笑ってかなあかなといつも励まされる曲です。

4. ゲストコーナ（2）：神戸常盤大学 戸谷富江さん

コーディネータになる前は大学で社会福祉の学部で地域福祉、福祉政策を主に学んでいた。障害の分野、高齢者の分野、児童の分野で相談援助をするという社会福祉士の国家資格があり、資格取得のため1カ月間長田区社会福祉協議会の長田ボランティアセンターで実習した。地域福祉は地域の幸せを考えることで人と人が繋がり、住民同士が繋がるということに安心と興味を感じたことから人と人をつなぐコーディネータに惹かれた。その後1年間非常勤で長田区社会福祉協議会の仕事をした。2年間家庭の事情で離れていたが今年の4月に常盤ボランティアセンターで仕事をするようになった。

コーディネータの仕事は調整役で、他の団体からボランティアさんいませんかという問い合わせがあると学生と生徒を対象に団体と結び付けるのが主たる仕事です。活動前の調整、活動中のこと、活動後のフォローなどを行っている。イベント関係のボランティアの問い合わせが多い。学生の学びに繋がるボランティア活動を念頭に置いているので、ただ送り出すだけではなく何故その活動が行われているか、どうしてその団体はその活動をしているのか、何故ボランティアを受け入れるのか、などの背景を学生自身が学べるようにするため、広報する時は必ず何故その活動が行われているかを説明したり掲示している。学生の活動結果のフィードバックとしてメンバーの一人に感想、反省点を書いた報告書を提出してもらい、また個別に感想を聞いたり困ったことがなかったかなどの確認をするようにしている。

県立岩手大学ボランティアセンターとの繋がりは、両大学の教員がもともと繋がりがあり、常盤ボランティアセンター設立後岩手大学の学生ボランティアセンターにどのような運営をしているかの視察に行ったりしていた（岩手大学ではセンター長もコーディネータもすべて学生が実施）。また短期大学部では危機対応実践力養成プログラム（文部科学省から3年間の助成金）の中に「長田と震災」という授業があり、その中で岩手大学に行ったり、先方から来てもらったりして交流している。今年の1月に授業の中で学生25名と教職員と一緒に大雪の中岩手大学に行き、一日目は双方の取り組みを紹介し、その後炊き出し訓練を土鍋ネット（地域の方との交流を目的とした土鍋を囲む会）の地域の方と一緒に実施した。二日目は豪雪地域のため豪雪被害が起こったと想定し、ボランティアセンターを立ち上げ運営すること、また避難所の運営の仕方を学生が考えていく訓練を行った。岩手大学は中越地震の時先生と学生と一緒にボランティアに行っている。このようなことから東関東大震災後のボランティアに行くことについて岩手大学の方でコーディネータしてくれた結果、3月末に岩手県にボランティアで行くことが出来た。

ボランティアセンターの年間の活動実績は昨年は約60件あり、さらに説明会や学生のミーティングもあるので倍以上になる。コーディネータする上で難しいのは、学生は複数の活動に参加するので複数の学生に向けて調整していくところである。個別の活動の一つに肢体不自由児が暮らしている施設（おおぞらのいえ）が西区にあり、毎月学生が訪問しているが活動は施設で何かしてくることを目的にしているのではない。子供たちは学校、病院、施設の限られた範囲の生活になってしまうため興味を広げる活動をするを目標としている。視野を広げるために何をやるというものは決まっておらず、学生は子供たちが今何もしていないので話しかけようとか、おもちゃで遊んでいる子供を見てこういうことにつながれないかとかいったことを学生自身が考えて行動する必要がある。訪問の頻度を上げて顔見知りになることが大事であるが、そうすると学生も離れられなくなり、就職活動で行けないような状況になっ

た場合、子供たちは行けば喜んでくれると思うので時間を作って行きたいという気持ちになっている。

コーディネータとしての今後の抱負は、来たばかりなので学生とかかわる機会をもっと増やしたいと考えている。ボランティアセンターが校内の少しわかりにくいところにあり、場所を知らない学生もいるので話す機会を増やし、学生がどのような活動に興味を持っているか、大学としてどのような活動が出来るかなどに取り組んでいきたい。

現在登録学生は111名で、昨年から情報を渡している学生は180名ほどいる。

5. 中ちゃんの「こぼれた話こぼれなかった話」

阪神淡路大震災の1995年はボランティア元年と言われている。この年に被災地に駆けつけたボランティアは延べ138万人、バブル崩壊後の社会、生活の見直しの時期でもある。災害ボランティアが必要ではないか、多文化共生社会もわかるし、高齢化社会への対応の必要性などを認識した年でもあった。またボランティア活動への親近感も生まれ、専門家だけでなく一般人へも拡大した。その年にボランティアに参加した人の6割が未経験、5割以上が20才代以下、被災地外から来た人が6割、個人参加が5割以上であった。このように皆がボランティアに目覚めた年であった。今は学校教育でもキャリア形成の一環になっており、ボランティア休暇制度も出来ている。専門技術者を含めた災害時支援ボランティア登録制度、災害ボランティア・コーディネータの育成が急務として研修・育成が行われている。

ボランティアと言うことでは30年来の付き合いのある10年前活動中にお亡くなりになった草地賢一さんがおられる。この方はボランティア活動の指導者・実践者であり、30年ほど前から日本の第一人者でした。YMCAや草の根型国際交流・協力活動団体で活躍された牧師さんで、阪神大震災の時は地元NGO連絡協議会の代表で全国から集まったボランティアをまとめ、実際のニーズを発注する行政との窓口になった。この方には自主的な支援活動の高まりの中で行政の手の届かない部分への期待があり接近していった。草地さんは、私に、ボランティアの真髓をこう述べられた。「中嶋さん。(特に民間サイドの)ボランティアというものは、“頼まれてもしない、頼まれなくてもする”なんだよ」と言われて愕然とした。

阪神淡路大震災時のエピソードとしては、世界から応援がたくさん来てくれたがイギリスの救助隊はスイスなどより少し出遅れたため一次救助は終わり、消防などは現場への投入は不要と言う判断であった。せっかく来たのに活動できない日本はおかしい国ということになり、BBCが本国に宇宙中継する言い出した。その話を草地さんから知り、イギリス救援隊の宿舎に出向き日本の事情を説明した。直後外務省からの電話があり救援隊の名誉総裁はアン王女とわかり、イギリス隊の活躍する場所を提供した思い出がある。

東日本大震災でのボランティアは全社協によると、人数的には阪神・淡路大震災と比べて半分で7月で約60万人(阪神では7月で約120万人)。特に災害直後に大きな出遅れあり、ボランティア受け入れ体制が団体に限定するとか、地元ボランティアのみといった制限を加える動きもあった。まだまだ多くのボランティアの支えが必要なのでもう一工夫しなければならない。

6. ゆうかり大好きコアラさんの地域瓦版

今日姫路で花火があります。来週は神戸で花火があります。暑いので夜とはいえ熱中症にならないように注意しましょう。ヨガで冷やすという意味があるシータリー呼吸法と言うのがあります。舌を丸めてストローのようにするか、出来ない人は蝟のように口をとがらせゆっくりと線のイメージで息を吸う。肺の中に冷たい息が入っていくと次に口からゆっくり湿気を帯びた体の熱を奪った息を吐きます。それを何度か繰り返すと体が冷えてきます。これは地域の生きる知恵だと思う。

7. 来週のゲスト

来月のゲストは兵庫高校OBの高松悟さんにお越しいただきます。

番組に対するご意見、ご感想はこちらまで：yuukarinikanpai@gmail.com